

学生よみもの

イージス艦！！ きりしま 探検記

田 辺 義 明

2003年5月24日（お地蔵さんの日）、JDF DDG「きりしま」がペルシヤ湾方面の活動から帰るといふ、洋上発信の電子メールをかねてより受けていた都合から、海上自衛隊横須賀基地に向かいました。

前日の講義とゼミを終えて、茅ヶ崎の研究室から藤沢の宿（法華倶楽部）まで学生のクルマで送ってもらいました。翌朝、いそいそと指定された横須賀駅に向かいました。JR横須賀駅は初めてです。★駅前でビックリ。もう「第7艦隊さま！！」ではありませんか。駅前にタイコンデロガ級巡洋艦が並んでいるのであります。その



右手前にはスプルーアンス級駆逐艦とアーレイバーク級駆逐艦がいて、最初は自衛隊にもついに900番台のフネができたか？と考えて込んでしまったほどです。写真を撮ろうにも、駅頭の人々が写りこんでしまうのです。これでは横須賀市民は『世界の艦船』を買う必要がないでしょう。さすがに小泉純一郎首相の地元は違います。



スプルーアンス級には“かもめ（とんび？）”が舞っておりました。うしろはアーレイバーク級で、もう「おなかがいっぱい」。前夜、夕食は280gのステーキではなく、焼き肉定食程度にしておいてよかった、という感じです。望遠レンズではなく、デジカメでこの程度の収まりです。



★「きりしま」は、という横須賀の海自基地に入構するまえから見えていました。はつゆき級護衛艦と AOE（補給艦）に挟まっていた。うしろは DDH「しらね」です。海自のフネも、第7艦隊に劣らずデカくなったようです。対テロ警備の最中ですが、気をつけてほしいのは基地内を走るクルマだそうです。おそろおそろ「きりしま」に近づきました。うしろにも第1護衛隊群のDDが並び、目移りがして、ここは名画「ニフの入浴」を思わせます。登艦はおもむろに、と考えていたので、棧橋をゆっくりと歩きました。しかし米艦とは違って後部には大砲がまったくない護衛艦がそろっていて、この方向からではあまり勇ましくありません。



おっ「軍艦マーチ」を思わず口ずさんでしまいそうに、トランザム・スタンにひらめく「旭日旗」を見上げてしまいました。フネは写真の自動車と比べて、イトーヨーカドーぐらいあります。対岸にはダイエーがありました……。

★佇立する白い帽子は「CIWS」。「シウズ」と呼ぶのだそうです。先年の「リムパック」では「50年ぶりに米軍機を撃墜した」と誇らしげな前任海曹氏（砲水雷科）の言葉に励まされました。落とされたA6 イントルーダの乗員は、その瞬間なんと叫んだのでしょうか。やはり「リメンバー・パールハーバー！」だったでしょう。





艦上では、なにもかも大きすぎて、広角の浅いデジカメには収まらないのです。ハーブーン・ランチャーはがんばってもこの程度。しかたなく隣のフネのやつを借りて、カメラに収めました。

左舷から登艦しましたが、このあと右舷に出てから、中央のブルワークに沿って、まず艦首方向に進みます。

★目のまえには、ドデン！とオト・ブレダの 127mm砲が座っています。あこがれの大型砲ですが、やや図体が大きすぎて、カメラの



手に負えません。シールドを叩くと、ほんとうにFRP（強化プラスチック）でした。メーカーの日本製鋼所では、FRP をあつかっていないはず。どこか田舎の下請け企業が成型しているのでしょうか。砲塔の周囲の甲板には、5インチ口径の傷あとが並んでいました。カートリッジ式の弾薬ですから排莖のあとです。



砲塔にはフネの「撃沈マーク」が赤で二つ書き込んでありました。「実艦的」を2回沈めたのでしょう。なおハワイでの評価試験で打ち落とした“ドローン”の破片は、艦内通路に飾ってあります（たぶん“ファイアビー”です）。

DDG では 14 年度艦（5隻目のイージス艦）

からはアメリカ海軍の Mk45（砲身延長型、FNS社）となります。

イタリアのオト・ブレダは、まえのオト・メラ社です。3インチ「コンパクト砲」で一躍、世界の中小口径砲のブランドになってしまいました。さてフェイズドアレイ・レーダです。航海中は、電磁波の人体への影響を考慮して甲板作業を制限しているそうです。おなじみの電子レンジの巨大化ですから、それも当然です。





★艦首から眺めると、「護衛艦きりしま」ではなく、先代の「巡洋戦艦霧島」さえ想起されます。米戦艦「サウスダコタ」と渡り合って沈んだという立派な最期で、世界海戦史上でも砲撃戦で沈んだ最後の戦艦でした。
さて細部では「フリートサット（アメリカ艦隊衛星）」通信のアンテナが正面に

ついています。第7艦隊旗艦「ブルーリッジ」とはこれで通信したのでしょうか。その「ブルーリッジ」は「キティホーク」とともにお休み中です。アメリカ巡洋艦群の向こうに「ブルーリッジ」の上部構造物と、さらにドックにいる空母のアイランドが望めます。写真は「きりしま」艦橋からです。両ウイングの双眼鏡ではバッチリですが、デジカメではこれが限界です。



「CIWS」の“ファランクス”はオーバーホール順に、ブロック1Bへと換装されるはずですが。銃身の延長による散布界の収斂と、光学系センサーによるいわば砲側照準機能の追加、さらに俯角を下げることで、対ミサイル能力に加えて、ゲリラ的舟艇の攻撃にも備えます。これはイエメンのアデ

ン港での米イージス駆逐艦「コール」への自爆テロを受けての、また北朝鮮の工作船などへの対応です。思わず「CIWS」を見上げてしまいました。これは「21番砲（20mm1番砲）」とといいます。制式名称は「高性能20ミリ機関砲」で、住友重機械がGEのライセンスで生産しています。「できれば“ゴールキーパー（30ミリ7銃身のCIWS）”がほしい」と思った次第です。なお50口径（12.7mm）の銃架が2対増設されていました。さてアメリカ海軍は気になりつつも、「きりしま」の艦橋に上ることにしました。



操舵室は簡素です。舵輪は自家用車のものよりも小さく、主機出力の目盛り、「一杯」とあったのが面白いと思いました。蒸気タービン艦では昔、



「(安全弁が吹くまでの)一杯以上」があったようです(当時もそれは目盛りにはなかった)。

★艦橋を先に見てしまいましたが、神聖なる艦内に入るにあたっては、「きりしま神社」に参拝します。お賽銭を10円あげて来ました。ご利益はあるのでしょうか。霊験あらたかで、心配はないと思います。



まず艦内通路です。通路の中間に作業班の編成がホワイトボードにあって、作戦海域のままでした。「臨検」、「拿捕」はともかく「陸戦隊」があったのには驚きました。艦内は広くて清潔です。通路写真(下)左手の縦型ボックス状

のものは冷水器です。真水は1日50トン作っているそうです。舷側ですので、片側(左)壁面が傾斜しています。これが艦首方向です。さらに通路を進みます。「ラッタル(ラダー、急階段)」を下って、侵入して行きます。ラッタルでは頭をぶつけそうになったりしますが、通路の天井は高いです。至る箇所に破壊用の工具がありました。



★いよいよ見所です。下の写真で扉の上にある小さな真鍮のプレートが見えますか?。なななんと「CIC(戦闘情報中枢)」であります。おそれおおくもかしこくも、イージス艦の頭脳部に足を踏み入れるとは、まさに「尼僧院への夜這い」であります。なかは「対勢表示板」が4面と豪勢で、対空・対水上・対潜のすべてが集約されています。コン

ソールとディスプレイが並んでいます。うちの学校の情報学部教室どころではない、というところでした。情報プロセッサやストレージについても話を聞きましたが、“HDD(ハードディスク・ドライブ)”は洗面器ぐらいの大きさだそうです。「同時多目標処理」が売り物ですが、ミサイルの照射・追尾機が艦の後に2基ですから、4面あれば足りるのでしょう。閉回路テレビジョンが、

艦の前後・左右の実画面をモノクロで映し出していました。

★機関室には GE・IHI（石川島播磨重工業）のガスタービンエンジンLM2500の操作盤があります。LM2500は航空機エンジンの転用でボーイング767のものと同形です。「2500」という番号が「2万5千馬力」という意味と判りました。4基で「10万馬力の“鉄腕アトム”」です。なお中国の駆逐艦「ハルピン」も同じエンジンですが、第二次天安門事件によって、その後アメリカが中国に供給せず、同型2番艦の「チンタオ」は、ウクライナ製のエンジンで、やや減力です。下が機関室の表示板・スイッチ類です。



★居住区画には、筋力維持のトレーニングジム、ランドリーなど艦内の奥に入れば入るほど生活臭がします。科員の居住区だけは「5ヶ月の航海で、きたないから……」と入れてもらえませんでした。



医務室は、意外にも航海には医官が乗艦していなかったということでした。一方、理髪室には「200円。カミソリ代金、プラス100円」とあります。婦人自衛官の戦闘艦艇への配置はまだありません。



さて「肉じゃが」は海軍の地元である呉・

舞鶴両市が本家争いの最中ですが、いまの日本軍艦では何を食べているかは興味のあるところです。そんな気持ちで「科員食堂」を覗きました。学校の学生食堂よりはずっとマシなようです（料理を味見したわけではありませんが、コーヒーは2回もいただきました）。しかし長期の航海では「食欲が出ない」とのこと。



★ 戦闘区画に戻ります。中央ダメージコントロール（ダメコン）ルームです。



艦内配置がよく分かりますが、もっとも応急用には艦内をいくつかに分けて、それぞれに管制室があります。右はその艦内図です。砲水雷科の前任海曹氏に案内されましたが、水雷（いまは対潜水艦の攻撃手段はアスロック）の担当（砲水雷科）も、ランチャー（VLS=垂直発射台）がスタンダード（対空ミサイル）と共用のために、相互の連携が必要になっているそうです。小さな声で「TASSもありますが、VDSでは苦労



させられました」とのこと、「また上甲板で説明しましょう」といわれました。



“よろい戸”は、ガスタービンの吸気口です。「周囲での作業に注意」の掲示が書いてありました（異物・埃よけのため）。ハーブーン発射機はVLSではないのですが、これをVLSセルに収納することも可能で、さらに驚くべき発言がありました。「設計上は“トマホーク”も発射可能です」とのこと。

しかし「いまはソフトウェアが（米側から）提供されていません」でした。セルを数えても「61」という収納数は納得できません。と思いきや、「アメリカ人の細工には思えない」と海曹氏も言ったように、ミサイル収納の折りたたみクレーンまでもセルに納められていて「納得！」。後部はハリ



発着甲板も兼ねていますが、VLSのおかげで、スキッドがセル直上を避ければよいだけです。14年度護衛艦からはハリ搭載のイージス艦になります。ここから見上げた上部構造物も立派です。並んだアンテナ状のもの左にある「横棒」はヘリコプター発着の信号機で、その下部が航空管制室です。うえのふたつの

お椀アンテナは、対空ミサイルのスタンダードMR2の照射・追尾機です。パルスドプラーのセミアクティブでしょう。

★さてさて水雷の専門家である前任海曹氏は、自分が責任者であるMK46 短



魚雷発射管を「ご自由に」と大サービスで、わたくしに発射位置の45度まで旋廻させてくれました。なんと砲尾の回転クランクで、軽々とFRPの3連装発射管は動いたのです。この「ローテク兵器」でも自分で操作できたのには、ただ「感動」



して、思わず「これで北朝鮮のサンオ（鯨）潜水艦を海の藻屑に！！」。
★最後に名残惜しく、艦尾から全体像を眺めたのでありますが、22 番砲
（CIWS）と航空管制室などヘリ甲板からのショットです。
こうして後ろから見ると、やはりデカいフネです。巡洋戦艦とは行かずとも「軽
巡洋艦」とはとってもいいでしょう。
とにかく「（まだミサイルを）1 発撃たせてほしかった」という、「メカ好き」
にはおもしろい半日でした。 以上



——あの世で困っている金日成將軍さま——

